

デジタルプリゼーション時代の紙資料保存の重要性*

Isamu Sakamoto**

◁ 목 차 ▷

- | | |
|---------------------------|---------------------|
| 1. デジタル化のメリット | 4. ユネスコ、MoWプログラムのこと |
| 2. デジタル情報はすべてをカバーできない | 5. 結語 |
| 3. アジアの歴史文書研究とフィールド調査の重要性 | |

<국문초록>

디지털보존 시대에서도 종이기록물의 보존은 여전히 그 중요성이 막중하다. 그리고 '세계의 기록유산: Memory of the World: MoW'의 지정은 세계적으로 소멸되고 있는 인류의 기록유산을 보존하고 보호하는데 큰 역할을 한다. 아울러 일본 국내에서 진행되고 있는 역사기록물에 대한 수복(修復) 보존 활동을 상세하게 설명함으로써, 한국에서도 이러한 기록물의 보존추진과 활용추진이 수레(車輪)의 두 바퀴처럼 그 필요성을 각각 인식하고, 종이기록물에 대한 보존활동 사업에 더욱 박차를 가하도록 당부하고자 한다.

1. デジタル化のメリット

情報処理機器・技術の發達した今日においてデジタル媒体に変換し、保管する行政文書、古文書や寫眞の保管は以下のようなメリットがあり、便利である。

- ① アクセスの利便性 (アクセススピード、クロス検索、世界中からの24時間アクセス)
- ② 保管スペースの大幅削減
- ③ 情報の編集、發信の簡便性: e t c.

このように例示するまでも無く、今日の私たちはインターネットやデータベース、コンピュータを用いたデジタル情報化の恩恵を受け、それを愉しんでいる。もし、今私たちの手元からコンピュータを使ったデジタル情報やweb情報が使えなくなることを想像すると、研究やコ

* 이 논문은 “제3회 기록관리학 국제학술대회 / 기록매체의 보존관리”에서 발표된 논문임.

** 日本 古備國際大學 文化財修復國際協力學科 教授, 東京修復保存センターペーパーコンサバター.

コミュニケーション、マイコンを使った制御装置の便利さが「すべてが停止」するような衝撃を受けることであろう。

勿論、私や私たち1995年1月17日朝に発生した神戸の大地震を経験した者は、絶対の信頼性を誇る技術や日々の便利な生活が「絶対に明日も続く保障はどこにも無い」ほど「脆弱である」ことを肝に銘じた。安全性と最高の技術を誇った高層建築物、新幹線、高速道路、ライフラインがマグニチュード7.2の数秒の衝撃で完全に崩れたのである。崩壊と復興、破壊と再生、これは避けて通れない運命かもしれない。

2. デジタル情報はすべてをカバーできない

紙、フィルム媒体からのデジタル媒体への変換・維持コストの問題やデジタル媒体の脆弱さやハード・ソフトの急激な新製品の登場などの問題は、すでに様々な報告がなされているし、アメリカ製作のビデオ「Into the Future」でもよく知られているのでここでは踏み込まない。

私はペーパーコンサバターという仕事と関心から経験し、今まさに取り組んでいることをここで話したい。

ペーパーコンサバターが興味をもち、手や五感で扱う情報を「100」としよう。もし、今ここに持参した1冊の本をデジタル化した場合、多く見ても半分の「50」程度の情報しか移行できない。あるいは、本のどの部分に価値と重要性を感じているかによって、ある人は完成したデジタル情報に「0」の情報しかみつけないかもしれない。

この本はインドネシアのジャカルタで見つけた大事な本である。インドネシアではすでに忘れられてしまった(ダルアンDaluang)という素材を用いた、今から400年ほど前の本である。

このダルアンという素材は、日本の和紙の原料であるカシ(Paper Mulberry: Broussonetia papyrifera)あるいはハワイやポリネシア諸島のタパ・クロース(Tapa Cloth)の原料であるwauke, aute, hiapoなどと同じものである。この「Paper Mulberry」という不思議な木と文書の話は後述べる。

この本を高性能(1660万画素)のデジタルカメラで様々な角度、ディテールで撮影し、超高画質で微細な情報までも拾えることが可能になったとしても、このダルアンという素材の情報、感触、繊維組成分析(Fiber ingredient analysis)や二次元蛍光X線などでのハイテク分析にはデジタル情報化されたものでは対応できない。やはり、デジタル保存物は「複製」であり、表面の文字や繪という情報程度しか保有していない「便利なもの」でしかなく、ハイテク分析に使用したり、技術史や形態学の研究を行なおうとしたり、原物の感触を愉しんだりしようとする目的には使えないものであった。

3. アジアの歴史文書研究とフィールド調査の重要性

すでに長い歳月をかけて先人の歴史研究者は村落を含む様々な場所において、資料調査と資料採取あるいはマイクロ撮影事業を行なってきた。今更、村落を含む各地でのフィールド調査を行うことの意義を疑問視される方々も多いことであろう。すでに多くの資金を投入して現地調査やマイクロ撮影がなされてきたからである。各国政府、フォード財団やトヨタ財団も多額の援助を行なってきた。

しかし、これまでの文書調査や文書等のマイクロ撮影事業は、現時点から見ると非常に限定された、範囲の狭いものであった。歴史文書研究を支える素材分析技術や機器はこれまではあまり整っておらず、必然的に文書研究者や歴史研究者の必要とする情報や関心も狭いものとなったはずである。

ふたつの事例をあげておこう。

① オランダの繪畫の巨匠と言われているレンブラントのエッティング作品に43枚の和紙を使った作品がある。これまで日本や外國のレンブラントや和紙研究者はレンブラントの使用した和紙を「1645-48」年以降にオランダに輸入されたものと結論づけていた。様々な資料研究から導き出された結果であった。今も内外の研究者やマスコミのほとんどはこの説を引用している。このことについてT. Yasudaと筆者は共同研究によりオランダ国立公文書館の書庫に眠る和紙文書の使用状況をサンプル調査し、1637年以降レンブラントがエッティングに使用したと

同種の多量の鳥の子紙(三桎紙)がオランダに輸入・使用されている事実を文書の素材研究で明らかにした。

② 冒頭でダルワンというカジの木(Paper Mulberry)から製作されたインドネシアの本のことを紹介した。この「カジ」という木を原料として文書や神聖な服に使用する文化は韓国、日本、台湾なども含め広く各地に存在したと推定される。その注目される「カジ」を使ったダルワン同様の古い本がベトナム中南部に住む少数民族Cham文書の中からもこの2月に筆者らにより発見された。

このような原物を使わないとできない文書研究は、新聞や質の悪い雑誌などにおいても少数ながらはじまってきている。また、図書館、文書館において話題となったNicholson Baker'sの《Double Fold: Libraies and Assault on Paper》(2001)においても、現物資料の保存と廃棄について利用者側からの問題提起がなされており、各国で反響が広がったことも記憶に新しい。将来の利用者、研究者にとって現物保存の対象はGolden letter

のような美術品的な文書だけでなく、日常的に使われた行政文書においても求められてきている。

今後の歴史文書研究は、ハイテク分析技術も駆使し、素材を様々な角度から研究していく動きが増えてくると思われる。

この未来の時代に、デジタル化に際し、オリジナル文書の価値を分からずにスペース節約のため廃棄してしまう、あるいは原物のハイテク分析が不可能になるような誤った修復処置を行った、という失敗を繰り返さないようにしなければならないだろう。

4. ユネスコ、MoWプログラムのこと

このプログラムは草案者の意図や願いととは裏腹に、あまり理解されておらず、一般的に人気がない。しかし、フィールド調査を積極的に実施している文書研究者やペーパーサバターから見ると、このMemory of the Worldプログラムにもっと頑張って、実際に危機にある各地に残された大事な文書類(民間所蔵であっても、國の所蔵であっても)を「具体的に守っていく

」アクションを期待し、活発になることを期待している。ひとつの希望として、すでに実績のある野生生物の絶滅危機を評価、公表しているIUCN(国際自然保護連合)レッドデータブックのような、各地で危機に直面している歴史文書を登録し、危機から守っていく制度の導入だ。この分類では「すでに絶滅EX」「自然環境での絶滅EW」「絶滅危惧I類CR+EN」「絶滅危惧II類VU」「情報不足NT」「絶滅の恐れのある地域個体群LP」とし、野生生物を守っていくことを世界的に協力して行なうことを目的としている。熱帯気候や戦火、自然災害等で危機にある歴史文書を次世代に残していくために世界各地の研究者や文書館員、伝統技術保持者、ペーパーコンサバターが協力すれば成果をあげることは期待できるであろう。

5. 結語

この数年、日本国内での修復活動に加えて、インドネシア、ベトナムの国立公文書館と協力し損傷のひどい歴史文書の修復保存事業、および伝統文書素材の調査を行ってきた。内容としては、日本および現地での修復や保存環境に関する技術的トレーニング、修復機材や技術の提供(文化無償援助Cultural Grant Aid)、自然災害後のリカバリー復旧作業、文書素材の繊維組成分析、彩色絵の具の分析などである。修復技術の上からは、Long Wire Leaf Casting Machine、Non-Aqueous Mass Deacidificationなどの利用。地元の素材に合わせた修復用紙の開発(ベトナムのHan-Nom文書ではベトナム在来の植物繊維を使って伝統紙を復元製作した)などがある。

これまでのアジア諸国での経験から「損傷が著しい」という文書の状態であっても、廃棄してしまうと、大事な上述のオランダやインドネシアでの事例のような新しい発見は不可能になってしまう。どうしても、廃棄や修復を行なう必要があれば、その前に素材の科学的調査を行なうことが早急に必要となる。

資料の保存と活用におけるデジタル化と原物保存は、車輪の両輪のようにバランスが必要だと改めて思う。